

三島由紀夫研究

—三島事件とメディアの反応 雑誌特集の変遷から(『新潮』、『国文学』を中心に)—*

佐々木勇人 (学籍番号 200821655)

研究指導教員:黒古一夫

副研究指導教員:綿拔豊昭

1. はじめに

作家三島由紀夫はノーベル賞候補にもなった戦後日本を代表する作家である。1970(昭和 45)年11月25日、自ら組織した「楯の会」メンバー4人とともに、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地を訪れ、突如、クーデターを呼びかける「檄文」の配布と演説を行ったが失敗に終わり、直後に割腹刎頸という衝撃的な自決を遂げた。この日の出来事は、40年経った今もなお同時代を生きた人々を中心に強烈な印象を残している。

本研究は、「三島事件を社会(人々)はどう受け止めたか」という問題意識を中心におきながら、主に文芸雑誌『新潮』(新潮社)における三島由紀夫特集についてその変遷を追うことで、時代とともに事件に対するメディアの反応がどう変化していったのかを考察するものである。当該雑誌を調査対象として選定した理由としては、没後40年の今日までに、複数回、ほぼ定期的(没後20、30周年)に特集を組んでおり、また、同一筆者が複数回にわたり執筆をしていることが挙げられる。

方法としては、各号特集の読み込みを行い、各論者が事件や著作に現れた三島の言動について、どのような観点により考察を行っていたのかを分析し、時代とともに、事件に対して人々(メディア)の反応がどのように変化していったのか明らかにする。

三島研究全般に関して言えば、膨大な数の先行研究が存在しているが、著作自体の研究や作家論ではなく、雑誌メディアを対象とした本研究と類似の目的を持つ先行研究は、調査した範囲において確認されなかった。この点から、本研究は三島研究において、新しい観点を提示できるものだと捉え、そこに研究意義があると考ええる。

2. 論文構成

本論は序章から終章まで、400字詰め原稿用紙で約334枚とし、正文の部分を4章で構成している。序章で研究背景・目的・方法・研究意義の概略を示し、終章では、第1章～第4章までにおいて考察された特集記事の年代ごとの変遷とその傾向に関する時代背景について考察している。正文の4章は、没後1年目(1章、2章)、没後18、20年目(3章)、没後30年目(4章)で構成され、『新潮』各号に関して、それぞれ3～4の考察点に基づいて節を構成している。正文第1～4章までの概略は以下のとおりである。

3. 没後1年

『新潮』昭和46年1月臨時増刊号は、三島事件の直後に執筆が行われ、林房雄、村松剛、武田泰淳、中村光夫、江藤淳、林健太郎をはじめとする三島と交流のあった論者たちが独自の観点を通して、それぞれ同情的立場や、否定的な立場を取りながら「なぜ、三島由紀夫は行動を起こしたのか」という事件の動機への考察を行っている。

翌年の昭和46年1月に刊行された『新潮』昭和46年2月号特集においては、事件後1ヶ月間におけるマスメディアや文壇界の反応への言及が目立っている。このうち、「三島由紀夫の死」という括りでの総勢28名の回想・感想が組まれているが、うち三島と直接的に交流のあった11名が、「今は語りたくない」と述べ、また「何でも語ろうとする周囲を批判」する意見や立場を表明している。周囲やマスメディアが事件をあくまで「文学的範疇」にとどめようとしているという指摘もなされている。

4. 没後2～17年

第1章、2章で取り上げた昭和46年の2号から、第3章で取り上げた昭和63年1月号までの期間

*“A Research on Yukio Mishima -The Mishima Incident and the Reaction in Media - Since the Change in the Feature (Focusing on “Shincho” and “Kokubungaku”) -” by Hayato SASAKI

において、特集は没後2年目の昭和47年11月号における小特集以外は組まれず、数本の記事が不定期に掲載されるのみであった。特に、没後2年目から10年目までの間には7年にわたる空白期間(1973～1979年)があり、『新潮』誌における三島由紀夫の扱いがこの期間において急速に縮小していたことが明らかである。

5. 没後18、20年

記事の量的な減少とは別に、『新潮』昭和63年1月号、平成2年12月号両特集においては、それまでと異なる、新たな傾向が現れ始める。一つ目は、「肉体と言語」「神の問題」といった新たな観点の模索である。養老孟司、吉本隆明らは、三島における「肉体と言語」の関連性に着目し、その行動と作品中から抽出される三島思想との関連性を考察している。また、文芸評論家の富岡幸一郎と芥川賞作家の木崎さと子の観点として、三島の天皇論、芸術論という要素から、三島における「神の問題」というテーマが新たに見出されている。二つ目の傾向としては、島田雅彦、浅田彰の対談で明らかになった、「時代と三島」視点の登場であり、三つ目は、海外における「ミシマ研究」を逆輸入していく傾向である。

没後18、20年において全体として現れてきた傾向としては、三島の主義主張における政治的な側面から徐々に離れ、“三島文学の思想”の考察へと変化していったことである。

6. 没後30年

全体的には事件そのものへの言及が激減し、個別の作品論や、作品中に見られる三島思想のいくつかを個々に論じるスタイルが非常に多くなった。作品論などの個別要素を総じて、どのような大きなテーマや観点でもって考察しているのか、各々の論者の立場・切り口が明確に示されておらず、三島の思想と事件の関係を捉えるマクロな視点から、思想そのものを作品論という“部品”から解釈するというミクロなアプローチに完全に切り替わったのである。

7. まとめ —特集の変遷と時代背景—

文壇の人々をはじめとした日本のメディアは三島

事件という“死に方”と作家三島由紀夫という“人間”の2つの関連性に対して、政治や思想、時代といった大きな視野で捉えるマクロな視点でのアプローチから、主観的な切り口や立場を持たず、作品論というミクロなアプローチで取り組むようになり、三島事件という問題を文学の問題としてその範疇に収めてしまうようになった。本研究はこの傾向を明らかにしたが、この傾向は、三島の死をひとつのターニングポイントとして、70年直後の極左テロの頻発と衰退及び新右翼(民族派)の台頭と活発化、80年代のニューアカデミズムブームを経て、「絶対」から「相対」へとシフトした日本の“知”の構造の変化と重なっていたと考えられる。

8. 課題

本研究では、時代ごとの変遷に着目するために調査対象として、主に『新潮』誌を選定したが、そもそも『新潮』誌と同様に多くの三島由紀夫特集を組む『国文学』などの他雑誌との相違点、あるいは『新潮』編集部における時代ごとの編集方針の変遷といった点まで言及することができなかったため、『新潮』誌特集の変遷だからこそ見えてくる点についての考察に不足があった。単に執筆者の世代交代だけではなく、特集内容に変化が生じた背景には本研究で指摘したように時代的要因であったということについて強調しきれなかった面がある。また、没後2年～17年の期間において、特集数が激減する「空白期間」が存在したことについて、さらなる考察を行い、最終章で述べた時代背景との因果関係をより明確に示す必要がある。

文献 (主なもの)

- [1] 『新潮』昭和46年1月臨時増刊号 ほか,新潮社,1971～
- [2] 三島由紀夫,『三島由紀夫全集』,新潮社,2000～2004
- [3] 井上隆史,佐藤秀明,松本徹編,三島由紀夫事典,勉誠出版,2000
- [4] 安藤武(編著),三島由紀夫全文献目録,夏目書房,2000